

との関係把握に有効であり、さらに超音波診断、シンチグラフィ、C・T検査を併用すれば、より精度の高い診断が可能と思われた。

演題5. 当講座におけるポリクリ実習時の咬合の診査と昭和57年度の分析について

○熊谷 敦史, 長田 亮一, 奥山 祥充
岡田 喜明, 上野 和之

岩手医科大学歯学部歯科保存学第二講座

昭和57年度歯学部5年生を被験者とし、22歳から34歳までの男性71名、女性19名の計90名について、開口および閉口運動、顎関節の雑音・疼痛、安静位空隙、頬圧痕・舌圧痕、側方運動に関する分析を行った。

開口運動時に顎の変位が認められたものが男性で26.8%、女性で38.9%、閉口運動時に顎の変位が認められたものが男性で23.9%、女性で38.9%であった。最大開口位は男性が47.7mm、女性が43.0mmで有意差が認められたが、関節頭回転軸開口径は男女とも17.9mmであった。安静位空隙は男性が1.53mm、女性が1.57mmで有意差はなかった。頬圧痕は男性で70.4%、女性で78.9%に認められ、舌圧痕は男性で49.3%、女性で55.6%に認められた。頬圧痕・舌圧痕はclenchingの場合に見られることが多いとされているが、一般にもかなり高頻度で認められた。顎関節の雑音は男性で36.6%、女性で31.6%に認められ、男性の2例は疼痛を伴っていた。顎関節に雑音・疼痛があったものでは、開口および閉口運動時に顎の偏位が認められたものが著しく多かった。関節頭回転軸開口位および安静位空隙は顎関節の雑音・疼痛の有無による有意差はなかったが、最大開口位では有意差が認められた。側方運動における咬合関係では、作業側でGroup functioned occlusionに近い関係のものが約半数、Mutually protected occlusionに近い関係のものが約3割認められ、また、平衡側での負担過重は約25%認められた(特に最後臼歯で多く見られた)が、男女間および顎関節の雑音・疼痛の有無による差異は今回の調査では明らかにすることはできなかった。また、今回の調査では、咬合異常に伴ういわゆる外傷性咬合を有している例は数多く認められたが、歯周炎を呈している例は殆んどなく、外傷性咬合の歯周病変促進因子としての役割はかなり限定された状態で演じられるということを示唆しているように思われた。

演題6. 補綴臨床における Forced Eruption の応用
——1症例を中心として——

○伊藤 邦彦, 塩山 司, 石川 成美
石橋 寛二, 中野 廣一*, 亀谷 哲也*
石川 富士朗*, 石毛 清雄**

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座
岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座*
福島県福島市大森歯科クリニック**

歯肉縁下深部に達する齶蝕や歯根破折などのように、保存と抜歯の境界に位置する症例では、その判定に苦慮することが多い。これらの歯を保存する方法として、歯槽骨削除後に、歯冠修復を行うことも考えられるが、その結果として歯冠歯根比の悪化、付着歯肉の幅の減少、歯肉縁の根尖側への移動など、支台歯をとりまく環境の悪化が予想される。そのため、演者らは天然歯を可能な限り保存するという立場を基本に、Forced Eruptionを応用して環境の改善をはかることを試みている。

今回、外傷により歯槽骨縁下約2mmの位置で破折した上顎左側中切歯に Forced Eruption を応用することとし、シジン暫間冠を装着後、矯正処置を行った。16週で動的処置を終了し、その後16週保定した結果、約2mmの移動が得られた。移動に伴い歯槽骨頂縁への骨添加が認められたため、冠辺縁を歯槽骨縁上に設定し、さらに歯肉溝底部と歯槽骨頂縁との距離を確保する目的で、歯槽骨削除を行った。陶材焼付鑄造冠装着後2年9ヶ月を経過した現在、機能的にもX線的にも良好な結果が得られている。

このように Forced Eruption の応用は他に比較し、支台歯をとりまく環境の保持、改善という面で多くの利点を有するが、一方で長期的にわたる矯正装置装着中の審美障害や異和感、Plaque control、歯槽骨削除等の外科処置の必要性など、いくつかの問題点も含まれている。また、Optimal forceをはじめ、骨添加や歯根吸収の起こる状況等に関しては、今後の研究課題として残されている。今後さらに長期的観察を続けながら、適応症の選択等も含め検討していく所存である。

演題7. 沢内村総合成人病検診における歯科予防活動

○横沢 茂樹*, 中里 滋樹, 谷藤 全功